

Title	井戸尻, 藤森英一編
Sub Title	Eiichi Fujimori (藤森英一) Idojiri (井戸尻)
Author	鈴木, 公雄(Suzuki, Kimio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1966
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.38, No.4 (1966. 3) ,p.126(560)- 130(564)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19660300-0126">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19660300-0126</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

こに最適の編著者を得て立派な舎史の完成したことはまことに慶賀に堪えない。編著者吉田氏におかれてもこのことにしたがわれたことは、あに労苦の思いのみでなく、きつと生涯の記念とされることであろう。それについても、許されるならば、いずれ近い機会になんとか思いを新たに入れかえ遠慮を去つて、のちのちのためにこのあとの二十年史を書きつがれることを執筆者に望んでやまない。

井戸 尻 藤森栄一編

中央公論美術出版  
昭和四〇年七月刊

鈴木 木 公 雄

我国の縄文文化は、土器・磨製石器の使用などからも知られるように世界史的な視野にあつては新石器時代の階梯に属するものといわれている。しかし乍ら新石器時代の特徴の一つとされている農耕については、今日に至るまで縄文文化中に、その存在を明確に示すべき資料が見出されておらず、従つて縄文文化は、いまだ捕獲・採集経済の段階にあるとされている。これは一般の新石器文化に比する時、やや特異な例に属するものとも考えられるのであり、従来いく人かの先学が縄文文化における農耕存否について検討を加えて来た。今日の学会においては、大勢として縄文文化にはいまだ農耕は行われておらず、その後半においては、かなり高度な採集・捕獲（狩猟・漁撈）が発達したものとする見解が支配的であるが、近年来、藤森栄一氏を中心とする人々は縄文文化中期に、すでに何らか

の形で農耕が存在したと認められるという見解を公にされ、九州地方晩期縄文文化にも大陸農耕文化との関連をたどるような遺物が存在し、弥生文化の成立に先立つて農耕の開始を示すような傾向があることが発表され、これらの見解に刺激されて一躍縄文文化中期以降における農耕の問題が脚光をあびるに至つた。縄文文化晩期における農耕の問題は、晩期という時点にのみ限定するのならば、来るべき弥生文化の先駆的な開花として捉えることも可能であり、問題はむしろ弥生文化の発生とかわり合うものが多く、縄文文化の本来的な性格に関連する場合は、或は少ないかも知れない。しかし乍ら中期縄文文化に、すでに何らかの形で農耕が行われていたかも知れないとすれば、これは縄文文化の本質にかかわる問題となり得ることが考えられる。少くとも中期縄文文化以降に何らかの農耕が開始されていたとすれば、それ以前と以後における縄文文化の評価は同様ではありえないし、その農耕がいかなる規模のものであり、弥生文化をもつて開始される本格的な水稻農耕と、どの様にかかわりあうのであるかという点に至れば、これは単なる農耕の存否の問題をこえて、我国の原始文化の歴史的な展開の方向をいかに規定していくかというヴィジョンの問題にまで発展する可能性がある。そのような意味で、藤森氏等が精力的に説かれて来た縄文文化中期農耕論の根本資料となつていた南信濃八ヶ岳南麓に分布する井戸尻をはじめとする中期縄文文化遺跡群の報告書たる本書が刊行されたことは誠によろこばしく、これを機会に本書の内容を以下簡単に紹介することは有意義と思われる。

本書の構成と内容を先ず紹介すると以下のようなものである。

I 井戸尻・その周辺

II 井戸尻の遺跡とその調査

III 井戸尻の縄文式土器

IV 井戸尻の文化

V 井戸尻の生活

VI 中期縄文文化論

Iにおいては、南信濃八ヶ岳南麓の信濃境駅を中心とした富士見町およびその周辺に存在する遺跡群の考古学調査の由来と、付近の地形・地質に関する紹介がなされている。

IIでは、富士見町周辺の主な調査遺跡である、井戸尻・曾利・大花・井戸・新道・九兵衛尾根・藤内・貉沢・居平・立沢・大畑・一ノ沢・広原・徳久利・滝沢・猿古窪などの約二十遺跡あまりの個別調査の成果が報告されている。

IIIでは、これらの遺跡から出土した遺物の内で、土器をとりあげて総括し、早・前期の型式、中期初頭の型式、中期中葉の縄文式土器群、中期末葉の縄文式土器群、後・晩期の縄文式土器群の五項目に大別して記述されている。この内でもやはり中期縄文式土器の研究に最も意が注がれており、中期初頭の諸型式として籠畑式↓九兵衛尾根I式同II式、中期中葉の諸型式として新道・貉沢期↓藤内期（これはI式とII式に細分される）をへて、爛熟期ともいうべき井戸尻期（これはI〜III式に細分される）さらに退嬰期ともいうべき曾利期（これはI〜V式に細分される）に至るまでの型式編年が詳

細に示されている。そしてこの編年の作成にあたって一部では堅穴住居址相互間の重複による新旧の関係によつて土器を編年するという、従来の貝層による分層発掘とは異つた方法が採用されているのは注目すべきであろう。この方法は貝塚を全く伴わない内陸部の遺跡においては、今後さかんに用いられる方法になると考えられる。又中期縄文土器の編年それ自体も、関東・東海・北陸といつた周辺地域の編年よりも一段と細分化されている。この編年が、それら周辺地区の編年とどのように対比され影響しあうかについては、今後の検討にまたねばならないだろうが、一例をあげれば、貉沢式土器についてのべた部分で、長野県の阿玉台式土器が、従来いわれてきたように関東地方からの将来品ではなく、中部高地においても立派に一つの文化相として存在したのであり、「阿玉台式が勝坂式と並行した中期中葉土器の一地方相であるという考え方は、この地方では考え直した方がいいようである」（本書八二頁）と示された点など、関東地方で阿玉台式についての知見のある人々に意見を求めてみたい所でもあらう。

IVにおいては、IIとIIIで明らかになつた種々の遺構・遺物の中から、特に住居址・聚落構成の問題・立石・石棒・土偶等々の宗教的信仰的な遺物、土器製作に関する研究などが収められている。この中で、中期中半の遺跡は、同一標高線にそつて集約的に立地する傾向を示し、個々の聚落においても、住居址によつてかこまれた聚落中央部を何らかの広場としていたものや、新道遺跡のように、そこに十五本の土器が林立していたものもあることから、聚落内に居住

地区とそれ以外の地区（おそらく公共的な性格を持つ）といった一種の聚落構成がたどれるのに対して、中期の後半以降になると個々の聚落の規模はむしろ縮少し、聚落の拡散が行われたらしく、聚落それ自身の構成も不明確となることのがのべられている。この中期後半における遺跡の拡散化は、結論の部分において或は焼畑耕作による出づくりによるものではないかと説明されている。聚落が、孤状ないし馬蹄状にあるいは環状に住居をめぐらし、それらによつてかこまれた空間を住居地区とはせず、何らかの公共的な性格をもつた地区とするような構成を示すのは、縄文文化前期末に確実な例があり、それ以後、後・晩期までそのような聚落構成が一貫して存在していたようである。本書に示されたものも、そのようなものの一例を示しているであろうが、それが中期後半になるとくずれをみせて来るといふ点は興味がある。その原因は藤森氏のいわれるように「生活の変化に基く社会構造の変貌に求めねばならぬ」ものであるかも知れないが、それがはたして八ヶ岳南麓という限定された地方のみの現象でないとするればその「生活の変化」は、はたしてなにも基くものであろうか。藤森氏は焼畑における出づくりによつてそれ村落の分岐が行われたということでも明らかにされれば、その原因の追求はさらに興味あるものになると思われる。

Vは本書の中でも特に異彩をはなつ部分である。先ず八ヶ岳南麓地帯の食用原生動植物についての詳細な説明があり、当地域の生態的環境を復原する中で中期縄文人の季節毎の食料獲得について検討

している。その結果、越冬にさいしてはかなりの量の保存食料が期待されるが、春から夏にかけての期間が端境期となり、これをいかにのりこえるかが当時の人々にとつて重要な問題となり得た点を指摘し、これらの人々の最も欲したものは春と夏の澱粉質食料であつたとされる。この点で曾利第五号住居址から四ヶのコッペン状と捻り餅状一ヶの炭化食品とおもわれるものが出土したのは、中期縄文人が予想以上に植物質食料特に澱粉質食料を摂取していたことを物語る証左となるものである。この炭化食品が、いかなる原料によつて作られたものかを明らかにすることは、藤森氏の農耕論の重要なポイントになるものであり、我々も又その結果を発見以来注目して来た所であつたが、今日まで化学分析によつてはその原料をつきとめることが不可能のようである。本書では、そのような方法とは別に、当時の人々が用いることの出来た澱粉質原料の中で、どれが最もパン状炭化物に近いものを作り得るかという実験を行つた報告が記されている。それによると全く同一のものを作ることは出来なかつたが、比較的近い状態に焼ける原料は、コメであり、ついでコムギ・ドングリ・クリという順であるという。しかしこれをもつてしてはパン状炭化物の原料を決定するきめ手はつかめなかつた。しかし乍ら、原料は何であれ彼等の間での植物質食料の占める比重が大きかつたことは考えられ、煮沸用具である深鉢形土器の中に、蒸し器の機能を持ったものが認められ、土器のセットも煮沸・貯蔵・供献という分化をみせており、生活用具たる石器も、中期においては、石鏃が減少し、石皿・打製石斧・凹石などいわゆる非狩猟的な

ものが増加していることを指摘し、これらの石器は、澱粉質食料の加工・調理に役立つこそすれ決して狩猟活動の活発さを示すものではないとされる。これ等からして、中期縄文文化人の生活は、植物質食料に対する依存度が高かったと考えられ、そうであればあるほど「原始的な焼畑式陸耕に移行していくであろうことは、ほとんど紙一重の差でしかなかった」（本書一五二頁）とするのである。

VIは上述して来た諸々の問題を整理し、中期縄文文化に一つの性格を付与しようとする結論の部分である。以上からも明らかなように藤森氏のいわんとする所は縄文中期農耕論である。農耕の具体的内容についてはあまり明確ではないが、原始的な焼畑陸耕を考えておられるようである。即ち、この地方の中期縄文文化のはん菜は、植物質食料によつて支えられたとみられ、石器類の様相もこれを肯定こそすれ否定はするものでなく、土器においても貯蔵・煮沸・供献の分化がみられ、土偶その他の宗教的遺物の発達は地母神的信仰の存在を窺わしめるのであつて、このような生活と文化の復原によつて示される中期縄文文化の社会は、著るしく農耕社会的な構成を示しているとするのである。そしてたとえその農耕がいかなる植物をその作物としていたかが今日不明であつたとしても、問題は「何を作つたということではなくて、本当は、社会構成が、何かを作る環境に至つていたということ」（本書一五九頁）にあるとされる。このことから知られるように、藤森氏の中期農耕論の根底に横たわるものは、中期縄文文化の繁栄ないしその繁栄をもたらした社会の原動力を、どの様に再構成し理解すべきかという点なのであろう。

「われわれは考古学者である。植物学者でも農学者でもない。われわれの仕事は本当は、米や麦を捜すことではなくて、遺跡遺物を通して農耕社会的な文化機構を追求することではないだろうか」といふ一言が、何より藤森氏の意図を雄弁に示しているといえよう。

以上本書の内容を紹介したのだが、はたして藤森氏の中期農耕説は成立するであろうか。先ず問題となるのは藤森氏が、著るしく農耕社会的な構成を示しているとされる個々のファクターが、はたしてほんとうに農耕社会的なものとしてうけとることが出来るかという点であろう。藤森氏のこの見解に対して、最も一般的な形でなされている批判の一つは、本書の序文で杉原庄介氏がのべられているように、中期縄文文化の繁栄は農耕の導入によつて可能となつたのではなく採集経済の段階としての「野生食用植物・獣類の繁殖、採集捕獲の技術、両者の貯蔵の方法などの高度な発達」によつても可能ではないかとするもので、この点を最も力説されたのが永峯光一氏である。永峯氏はユリウス・リップスのとなえる収穫民 (Harvester) の概念を引いて、中期縄文文化の繁栄が、農耕によらずとも成立すると説明した。<sup>(3)</sup>要するに、高級な狩猟民というものは、必ずいくつかの副次的な食料獲得の手段を有するものであつて、それらの季節的な運用によつてかなり高度な文化的繁栄が期待出来るという考え方は、多くの人々に潜在的に持たれている考え方であろう。この点永峯氏の批判は適切であつて、藤森氏が提出された問題は、たしかに中期縄文文化が、農耕社会的な構成を示していると説明することは可能であるとしても、それが農耕社会でなければならぬと

いう必然性をも十分説明していないといわざるを得ない。永峯氏が藤森氏と同じ点をとり上げて異つた結果を唱えうるといふことは、どちらにしても可能性のあることを示すものであつて、どちらか一方でなければならぬという必然性をもつた論理構成がまだ出来ていないという風に評者は理解しておきたい。

次に問題とすべきは、農耕ということばをいかに理解するかという点にある。換言すれば、中期に存在した農耕が（もしあつたとして）どのような規模であり、彼等の生活の上でどのような比重を占めるものであるかという点である。この点で農耕という用語を用いることはある意味で混乱をひきおこすおそれがある。我々が農耕といつた場合先ずイメージとして描くのは弥生文化における農耕である。この場合の農耕は、少くとも生活手段の主要な部分が農耕によつて占められており、社会全体も農業の持つメカニズムによつて律せられていくような方向を持つものとして理解することになるだろう。少くとも農耕社会というならばそのようなものとして評者は理解するのだが、仮に縄文農耕といつた場合、あたかも縄文文化が、そのような社会であるかの錯覚にとらわれるおそれがある。縄文農耕論に反対する人々の農耕に対する考え方は、おそらくそういうものが多いのではないかという点は、先の永峯氏の批判の中にも窺うことが出来る。この点の混乱を整理して、縄文農耕論の今後とるべき方向を示したのが赤松啓介氏である。<sup>(4)</sup>氏によつて、縄文農耕論の理論構成の不備、問題の焦点は明確になつて来たといえるのだが、藤森氏がこの点をあまりふれておらないのは残念に思われてならな

い。

これらのような点から、評者も又藤森氏の所論に全面的な賛意を表することは出来ないが、別な面から藤森氏の意図には敬意を表するものである。それは何といつても藤森氏が中期縄文文化について、かなりはつきりとしたヴィジョンを打ち出されたということにある。ヴィジョンを語ることは、単なるデータの物理的蓄積によつて可能になるものではなく、そこにある考え方を導入することによつて始めて可能となる訳で、実証の段階から認識の段階に歩を進めるために、より整備された方法的思考が必要とされる理由もそこにある。評者は藤森氏が中期農耕論をとなえた本当の意図は、農耕の存否にあるのではなく、いかにしてデータから一つの歴史像を語るかという点にあつたのではないかと私考している。そうであれば、藤森氏の中期農耕論によつて提起された種々の問題は、今後の我々に貴重な示唆を与えるものとなるだろう。

註(1) 藤森栄一 日本石器時代研究の諸問題 考古学研究九卷三  
号

同 縄文中期文化の構成 考古学研究九卷四号

同 縄文時代農耕論とその展開 考古学研究一〇卷二号

(2) 藤森栄一 縄文中期文化の構成 考古学研究九卷四号

(3) 永峯光一 勝坂期をめぐる原始農耕存否問題の検討 信濃

一六卷三号

(4) 赤松啓介 原始農耕についての断想 考古学研究会十周年

記念論文集所収